

# 「朝鮮通信使」をめぐる戦後日本市民社会の歴史実践：在日朝鮮人歴史家・辛基秀（1931-2002）の活動を中心に

山口，祐香

<https://hdl.handle.net/2324/4475218>

---

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 山口 祐香

論 文 名 : 「朝鮮通信使」をめぐる戦後日本市民社会の歴史実践  
: 在日朝鮮人歴史家・辛基秀 (1931-2002) の活動を中心に

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は 1970 年代以降に顕著な盛り上がりを見せて来た朝鮮通信使（以下、通信使）をめぐる歴史実践について、多様なアクターが繰り広げた豊かな実践の事例を取り上げたものである。更にその手掛かりとして、「善隣友好の使者」としての通信使像が打ち出される上で最も重要な立役者となった在日朝鮮人歴史家・辛基秀 (1931-2002) の活動と同時代の日本人市民たちとの協働を掘り下げ、様々なアクターが参加した越境的な歴史実践の軌跡を戦後日本の市民社会の中に位置づけて考察する。

近世の日朝を往来した使節団である通信使について、近年では、日本や韓国の各自治体や市民団体による顕彰事業や関連文化イベントが活発に行われている。例えば、長崎県対馬市の「アリラン祭り」や韓国・釜山市の「朝鮮通信使祭り」は地域の観光の目玉であると同時に、現代を代表する日韓交流事業の 1 つとなっている。一方、元来アカデミア以外では無名だった通信使の歴史に一般の人々が関心を寄せ、地域における歴史顕彰事業を始めるようになった契機は、1970 年代以降に活発化した在日朝鮮人歴史家たちによる通信使関連の著作や啓蒙活動であると言われる。このように、専門の研究者が行う歴史研究に限らず、普通の人々が過去の出来事や記憶に関わる日常の諸行為を、歴史学者の保莉実は「歴史実践」と定義した。そこで本研究は、通信使の歴史そのものではなく、様々な形で通信使の歴史に触れる人々が過去をどのようにして認識し、受け止め、顕彰し、利用しているのかといった歴史実践の様相に焦点を当てて記述していく。特に、これまで学術研究の俎上に乗せられてこなかった辛基秀をキーパーソンに据え、在日朝鮮人歴史家である彼がなぜ通信使の歴史に着目したのか、ナショナルな境界を生きる在日朝鮮人個人にとって通信使の歴史実践はどのような意義をもったのかを分析する。

第 1 章では、辛基秀の前半生を振り返りつつ、1970 年代以降に在日朝鮮人歴史家による通信使の歴史実践が行われる過程を同時代の社会的背景と共に分析した。とりわけ、戦後に辛基秀が携わった戦後日本の左翼運動組織や朝鮮総連における運動経験と挫折を詳述し、特定のイデオロギーや運動組織とは距離をとった個人活動を 1970 年代以降始めていく過程を整理した。なお、こうした動きは辛基秀だけのものではなく、同時期に多くの在日朝鮮人知識人たちが総連を離れ、独自の表現活動や歴史研究を深めると共に、当時高まりを見せた「朝鮮ブーム」を背景に、書籍や雑誌、講演会や研究会などの場を通じて、韓国・朝鮮に関わる様々な 이슈を日本の市民社会に向けて発信する歴史実践の展開が見られた。これらの状況を背景に、在日朝鮮人歴史家たちによる様々な論考の中で通信使の歴史も取り上げられ始めた。

第 2 章では、映像作家として本格的に活動を開始した辛基秀の代表作として、映画『江戸時代の朝鮮通信使』を取り上げ、その映画の制作過程と上映運動を取り上げた。視聴覚に強く作用する

映画は、見たことのない過去の出来事に関する特定のイメージと作り手のメッセージを多くの観客に提示する上で効果的な歴史実践の媒体である。映画『江戸の朝鮮通信使』も、カラフルな映像を通じて明るい近世日朝関係やローカルな民衆同士の交流の足跡を提示しようとする辛基秀の意図に基づいて制作され、市民らの手によって同映画の上映運動が全国各地で展開された。

一方で、映画公開直後の1980年代初頭にかけて、辛基秀を含む数名の在日朝鮮人歴史家が当時タブー視されていた韓国への渡航に踏み切った出来事は、その後の辛基秀らの歴史実践の方向性に大きな影響を及ぼすこととなった。すなわち、もう1つの「祖国」である韓国を直接訪問することは、日本人でも韓国人でもない「在日朝鮮人」としての自らの在り様の再発見であり、未だ知られていない歴史を掘り起こす実践を通じて、両国の単一民族的な国家観の克服に向けた在日朝鮮人ならではの活動を模索するようになっていったのである。

第3章では、1984年から3年にわたって行われた「朝鮮通信使の歴史をたどる旅の会（「旅の会）」の活動について、「旅」という行為を通じた歴史実践の事例として取り上げ、彼らがツアー後に書き記した感想文を資料として分析を試みた。「旅の会」の参加者には日本人や在日朝鮮人も含まれており、元来日朝関係史や在日朝鮮人問題に関心を持つ者や、既に何らかの市民運動に携わっている者もいた。彼らにとっての「旅の会」は、実際に現地を訪れることで、五感を通じて通信使の心情や歴史を追体験し、過去から現在に至る日本と朝鮮半島の関係性を再考しながら、自分自身の内面や国家観・歴史観に変革をもたらす鮮烈な経験となった。更に、参加者たちが、旅を通じて多様なバックグラウンドの人々と出会い行動を共にする中で、単なる娯楽として通信使の歴史を消費するのではなく、国家主導の「日韓交流」の枠組みを克服し、ナショナルな境界を超えた市民同士の主体的な交流や人間的な連帯を自ら実践しようとする思考の軌跡を読み取ることが出来た。

第4章では、辛基秀の拠点でもある大阪を舞台に、1984年に関西の行政や経済界を挙げて進められた「大阪築城400年まつり」に異議申し立てを行う市民のカウンター運動と、「青丘文化ホール」の開設を取り上げた。まず「ちょっと待て！大阪築城400年まつり」という名で進められた一連の市民運動は、韓国の民主化運動や同時期に発生した歴史教科書問題の状況に対する市民の問題意識を背景に、豊臣秀吉を大阪発展のシンボルに据えたイベントや都市開発計画に対する異議申し立てとして行われた。それは、民衆の視点から大阪の歴史的形成を見直し、在日朝鮮人を始め地域社会に生きる様々なマイノリティの立場から望ましい社会や文化の在り方の問い直しを目指そうという市民運動でもあった。また、1984年大阪市内に辛基秀が開設した「青丘文化ホール」は、地域に根差した異文化交流および歴史資料の収集拠点として重要な役割を果たしたことを確認した。

第5章では、1980年代後半以降、対馬を始めとする各自治体において通信使を題材に「日韓交流」を標榜する文化事業が成立背景に焦点を当て、国際交流や観光振興というベクトルから新たに通信使に着目するローカルなアクターたちが登場する過程を解明した。具体的には、雨森芳洲の歴史顕彰に乗り出した滋賀県高月町・長崎県対馬市の取り組み、日韓の政府および各地方の行政主体で盛んに進められるようになった通信使の歴史展示の状況、そして通信使の歴史顕彰に取り組む様々な自治体や民間団体をネットワーク化した団体として「縁地連絡協議会（縁地連）」が対馬に発足する過程を取り上げた。1990年の盧泰愚の訪日演説に見られたように、この頃通信使の歴史は、植民地支配をめぐる日韓の「不幸な過去」をめぐる対立ではなく、「善隣友好」をキーワードとする対等で友好的な相互交流に基づく新たな両国間関係の象徴として多用され、両国で盛んに歴史展示が開催された。また、通信使の往来と関連する地方の市町村にとっては、郷土独自の歴史的資源を掘り起こし、それを生かした地域活性化や国際交流を図る上で、通信使の歴史は大いに着目すべき存在となった。辛基秀は自身の通信使研究の蓄積をアーカイブ化する作業に着手すると共に、各地の資料館における展示や地域の歴史顕彰事業のコーディネーター的役割を担い、特に縁地連の発

足時には多大な貢献を果たした。一方で、辛基秀は「過去の歴史を隠蔽した上で日韓の友好をとこなえても、空虚でしかない」と発言したように、在日朝鮮人に対する民族差別の現実や植民地支配をめぐる歴史認識の諸問題が、「日韓友好」の言説の陰で見えづらくなりつつある現状を指摘し、日本と朝鮮半島をめぐる歴史の「真相」を明らかにするべきであるという立場を堅持し続けていたことが明らかになった。

終章では、各章のまとめに加え、本研究の持つ限界と今後の課題について整理した。

これまでの通信使研究は、歴史学領域における研究と、現代の対馬市を始めとする地域における日韓交流事例としての研究という2つの側面から検討が行われてきた。それに対し本研究では、通信使の歴史そのものではなく、歴史実践の様相に主眼を置き、なぜ同時代に多くの人々が通信使の歴史に着目したのか、彼らにとっての「通信使」とは何だったのかということを実証することで、既存の研究との差別化を図ったものである。また、その主たるアクターとして、通信使の歴史が一般に知られる上で顕著な貢献をしながらも、これまで学術的に取り上げられてこなかった在日朝鮮人歴史家である辛基秀を中心人物として位置づけ、従来の戦後在日朝鮮人をめぐる世代論や政治運動の枠組みでは捉えきれない個人のライフヒストリーと実践を取り上げると共に、これまで別個に論じられてきた戦後日本の社会運動史と在日朝鮮人運動史を接続し、その一側面を提示することを試みた。